

言葉の発達をうながす乳幼児期の環境

— 1歳～3歳までの家庭環境に関する考察 —

長谷部 和子

はじめに

子どもは生まれたときは何も話さない、しかし、生まれてわずか4年ほどで大人と細かい部分を除いて、ほとんど支障なく話をするまでに成長する。まずは生まれた瞬間から、極端なことを言えば、母親のお腹の中に居るときから既に周囲の言葉を耳にし、社会の一員になるべき言葉が話せる準備に忙しく頭脳を使っていると言われている。本来子どもはある一定の時期になれば言葉を習得していくようにプロミングされていて子どもが言葉を覚えられる良い環境におかれれば、特に教えるようとしなくても、ごく自然に母国語をマスターしていく。ところが最近では、言葉の始めるのが遅い子ども、発音が不明瞭な子ども、仲間と十分なコミュニケーションが取れない子ども、集中力がまるでない子どもなど今までに例を見ない程、そういった子どもたちが増えてきている。

保育園や幼稚園において、言葉の発達が不十分なために1人教室の隅にぼつんと立っていたり、仲間に入れず園庭の隅にばかりいたり、5歳の年長さんになっても先生の話がまるで聞けない子どもなど、昔からこういった子どもは存在したが、今や、引きこもり症や小学校で起きている学校崩壊なども関連し問題は以前より深刻である。これらの問題に大いに関連するのが「言葉」であり、少なくとも「言葉」が普通に話せる事で解決できる部分があるのであれば、そういった問題が起きないようにしたい。幼児期の生活環境に気をつけて援助すれば、その後の言葉に対する発達に大いに影響を及ぼすことを事例を踏まえながら考察したい。

1. 誕生から1歳まで

赤ちゃんは生まれてすぐの状態では目も見えなければ、もちろん耳もあまり聞こえない。生まれた直後の視力に関しては、明るさは認識できると言われるが 画像ははっきりしないようである。聴力に関してはいわゆる普通に聞く状態になるには視力より時間がかかると言われている。特に聞きたい音を聞いて聞きたくない音を排除するような、特定の音を聞き分ける能力を大人と同じように持つのは成長しただと後のことのようなのである。

この世に生を受けて、間もないこの時、一度に多くの音を赤ちゃんに聞かせてしまうことは子どもの聞く能力を発達させるには全く「害あって一利なし」で、1つの音を集中して聞かせる訓練を多く積み、それをはっきり認識し、そして次の音に移る方法でないと、集中する能力が身についていかない。

赤ちゃんは生まれた日から母親の声は聞き分ける。というのは、母親のお腹の中に居る時に既に母親の声を聞いているという報告がなされているからである。ほとんどの赤ちゃんが頻繁に耳にするのは母親の声で、毎日授乳のとき、オムツ換えのとき、お風呂に入っているときなどで、その時々母親以外のさまざまな雑音が子どもの耳に入ることは望ましくない。赤ちゃんにとって、この世の中のどんな音も初めて聞くものがほとんどで、少しでも聞こえるようになると、どの音に対しても音のする方向に顔を向けて音を聞こうと身体を動かして耳を澄ます。そしてこの後、種々雑多な音を経験することで、どれが何の音であるかを徐々に学習していく。

その中で、毎日「おなかがすいたのね」、「オムツをかえて、きもちがいいわね」、「ミ

ルクおいしいね」などという優しい母親の声を耳にして日々を過ごすことが、子どもの脳の言葉をつかさどるシナプスに働きかけ、徐々にその子どもの母語を確立していくことにもなる。

生後1ヶ月後ぐらいからクーイングが聞けるようになるが、機嫌が良いときに1人しゃべりのように「アー、アクン」、「クーン」などというリラックスした音を出す。これは赤ちゃんの出す最初の前言語的音声なるもので、赤ちゃんはまるでコミュニケーションしているように声を出す。

この時期に「赤ちゃんがまだ言葉が話せないから、言葉が話せるようになってから教えれば良い」と、ミルクを与え、おしめを換えるだけの機械的な作業のみに力を注ぎ、一切話し掛けなかった母親の元で育てられた子どもは、その後、言葉が出始める時期になっても一切話そうとしなかったという例がある。最近では知的レベルの高い母親、つまり高学歴の母親に、このような例が増えていると言われる。

クーイングとともにその後、頻繁に見聞きするようになるのは「笑う」という行動である。1) 実は笑い声をたてること自体が、子どもにとって大切な発話訓練の一環であることがわかってきた。「ハ・ハ・ハ」と声を出す際には、まぎれもなく複数の音節が明確に認められる。2) 声をたてて笑うという行動は、決してそれだけが単独で現れるわけではないことに気づくだろう。下肢を何度も繰り返し蹴りながら笑うのである。もっとも蹴るといったところで、現実には何か存在する物を蹴るわけではない。当然のことながら、このころの赤ちゃんは、しきりにリズムカルに下肢の屈曲・伸展を繰り返し、空を蹴るのである。

この空を蹴る運動も生後5～6ヵ月にピークを迎え、やがて手の動きへと移っていく。そして、おすわりができるようになってくる。簡単なおもちゃなどにも興味を示し、手を動かして握ったり、投げたりと色々なものを手に取って肌で感じている。このころの赤ちゃんは体の動きがとても活発になり手と足が一

層よく動くようになっていく。その動きはご機嫌の良いときほど良く動き、まるで会話をしているかのようにも見える。話し掛けるとそれに合わせて音声を出し体を動かす。赤ちゃんは自分の言いたいことを言葉で表せないでいるが、確かに全身で会話をしているのである。

この時期には言葉が人間の気持ちを現すものだということがおぼろげながら赤ちゃんにも分かるようになる。怒りの声にはおびえ、優しい声にはリラックスして甘えたような音を出す。この時期になると「バババ」、「パパパ」、「マママ」、「タタ」、「ダダ」などという唇や舌を多く使う喃語が聞けるようになる。巷で良く耳にするのは、「歯が生え始める時期だから、歯茎がかゆいのだ」という内容であるが、喃語を話し始める時期なのである。そしてこの喃語から初語へと発展していく。

生後間もないころから喃語時代を通じて赤ちゃんは身の周りにいる大人たちから注目され、何度も何度も言葉を掛けられていくことで頭の中に言葉の発音、イントネーション、語順、単語などをインプットして、いざ自分が話さなければならないときの準備に余念がないのである。身体全体を使っていろいろな音を出すのも何度も練習しなければその特定の音を正確に出せるようにはならない。肺、舌、咽頭、唇と大人がどのように口を動かしているのかを見ながら言語をつかさどるシナプスに母語をマスターしていくのである。

つまり、日本語を母国語にしている母親に育てられた子どもは日本語の発音を、英語を母国語とする母親に育てられた子どもは英語の発音をマスターして大人になっていくのである。この時期に耳にしなかった種類の母音・子音を将来練習することをしないで発音することは一切ない。もちろん、両方の言葉を聞きながら育った子どもは両方の母語の発音をマスターする機会を与えられているわけである。

まずは、母親に対する天使のような微笑みから始まり、クーイング、笑い、そして、喃語時代へと発展するのであるが、できる限り赤ちゃんがリラックスできるゆったりと静か

な環境を作って上げられることが望ましい。そして、赤ちゃんから多くの笑いが生まれてくるような快適な環境を用意する事が必要である。また、よく赤ちゃんの知っている人たちが、生き生きとした表情で話し掛けると一番喜んで良く声を出す。

この生き生きとした表情でという部分であるが、母親向け某テレビ番組で生後4～5カ月の赤ちゃんを対象に実験を行っていた。2組の親子（赤ちゃんと母親）がそれぞれ、別々の部屋で母親が赤ちゃんを抱き、「おお、よし、よし。高い、高い、高い。おお、よし、よし」と言うのである。①の母親は無表情でこれらの言葉をほとんど抑揚の無い状態で口に出す。②の母親は顔中に満面の笑みを浮かべ表情豊かにあやすのである。結果は一目りょう然、すなわち、①の子どもは全く笑わずほとんど声も出さず、ただ無表情に母親の顔を見ているだけだったり、身体が急に動く時に、多少なりとも恐怖の顔つきさえも表しているのに対して、②の子どもは「キャッ、キャッ」ととても大きな声で笑い、表情豊かに、場合によっては母親の声に合わせるかのように声を出していた。

ある保育園での保育士からの話であるが、生後6～8カ月ぐらいの「はい、はい」をし始めた6人の赤ちゃんが、天気の良い日には2～3回乳母車で散歩に連れてもらっていた。ある時、一人の保育士が「今日は天気が良いので散歩にでも行こうか」ともう一人の保育士に話し掛けたところ、それを聞いた、傍らにいた8カ月の赤ちゃんが「はい、はい」をしながら、出かけるための戸のほうに進んでいったというのである。それを見ていた赤ちゃん達も後についたというのである。この時期の赤ちゃんは全く話さないが言われたことは理解しているという良い例である。特に楽しかった経験と共に覚えた「散歩」という言葉は赤ちゃんにとって良い記憶として頭の中に残ったのである。

一般的に満8ヶ月ぐらいで赤ちゃんは「バイ、バイ」などという大人の言葉に答えて「バイ、バイ」の動作を行う。その他には、

指さし、「いや、いや」の首振り動作など、いつもの簡単な動作がどのようなものなのかを理解し、可愛いしぐさを見せてくれるようになる。話している人の気持ちもさらに一層理解するようになる。

この時期に、³⁾赤ちゃんは見回さなくても音源を突き止めることができるようになります。これは1人でおすわりができることと、耳と脳をつなぐ神経回路が出来上がるためです。この新しい能力が備わったことによって、周りの音の中から自分の選んだ音に焦点を合わせるという大切な能力が生まれてくる。まだ音源を探るのに時間がかかり、すぐに気が散るが、この焦点を合わせるという能力を十分に発達させることが将来、集中して話が聞ける子どもを育てることにもなる。すなわち、環境に恵まれていれば、周りの音の中から聞きたいものだけに集中して、他の音は聞かないようにする能力が育っていくのである。

そして、赤ちゃんは自分の出す音と周りの音をしっかり聞いて、比較し、周りの音に自分の音に合わせていく。このようにして、将来必要とされる、赤ちゃんの音に対する能力が確立していく。

この生後8～9カ月の赤ちゃんはまだ何も話さないが、かなりの言葉の意味が理解できるようになっている。ものの名前、人の名前、簡単な文章の理解など、頭の中で理解できることは大人の想像以上である。音楽や歌もまだ歌えないが、言葉にならない声を出し、体をゆすったりして楽しむ。そして、赤ちゃんは言葉の持つ不思議な魔力に本能的に気づき始めている。「あれが欲しい、これが欲しい」と指をさせば手に入ることを覚え、「いや」と思ったら体をのけぞらせて、泣けば周辺の大人が願いをかなえてくれるということも知るのである。ある面、コミュニケーションの中心になる機会を十分に与えられていることを知ることにもなる。逆に、「だめ」も理解するのがこの時期であることを大人が自覚する必要がある。

集中力を高めるという非常に大切な能力が備わってくるこの時期にこそ母親の語り掛け

が重要な役割を帯びてくる。毎日、30分間母親と赤ちゃんだけに静かな語り掛けの時間を持つことをサリーウオードは提唱している。彼女によれば、どれだけ忙しくても1日30分間静かな部屋で赤ちゃんに話し掛ける時間を持つこと。必ず赤ちゃんに近づいて、顔の高さを同じにして、面白そうなおもちゃを赤ちゃんの手の届くところに置いて、簡単な言葉で二人で会話しているかのように語り掛けるといものである。赤ちゃん自体はまだ何も話せないのであるから、「いない、いない、パー」、「お手手パチパチ」、「かいぐり、かいぐり」、「ぎっちらこ、ぎっちらこ」などと声を掛けながら、手を取り合って遊んであげるのである。この時に、赤ちゃんは1つのことに長く集中していられなくて、すぐに次の動作に移ってしまうのであるが、あくまで主役は赤ちゃんで、母親は赤ちゃんに合わせるようにすることを忘れてはいけない。そして、あくまで母親はゆったりした気分で赤ちゃんが興味を持っている内容に合わせてゆっくりと話し掛けることである。

毎日のあわただしい生活の中で、30分の時間を作る事は中々大変であると思うが、ミルクを与える時間やお風呂に入る時間等を利用したり、赤ちゃんが眠る少し前の時間を利用するとか、テレビを見て過ごす時間をテレビのチャンネルを切って赤ちゃんのために分けてあげるなどして一緒に遊んであげるとか、何とか工夫して時間を作る努力が欲しい。もちろん家族の理解が必要かもしれない。赤ちゃんにとって自分のためにお母さんが一緒に居てくれるという安心感が何者にも勝る語り掛けの贈り物かもしれない。

さらにこの騒々しい社会でテレビの音も周辺の音もあまり聞こえない環境を作り出してその中で母親と赤ちゃんの二人だけで居る空間を作り出すのも中々難しいことかもしれない。これもできるだけ努力することが望ましい。テレビやCDのスイッチを切る、家族の話し声は、しばらくは控えてあげるなどである。

話し掛ける時は短く簡単な文章を使うこと

である。この時期なら、幼児語、大いに結構である。日本語は英語に比べて幼児向けの言葉の数が多いと言われる。これは日本が幼児を大切に作る国であるからだとも言われている。擬声語も比較にならないほど多いので、機会があれば子どもに日本語の持つ楽しい響きを数多く聞かせてあげると良い。「ボールがころころ転がるね」、「お水がジャア、ジャア流れるね」、「もこ、もこと泡がでる」などと言えば、擬声語の部分だけを殊に喜んで笑ったりする。そして、その後、擬声語の繰り返しだけを早く口にすることもある。

テレビは見せないほうが良い。身体が様々な発達を遂げているこの時期、目にみえない部分である神経細胞などもどんどん発達している。この社会がどんな物なのか、はっきり把握できていないのに、どんどん画像が変わる、色彩的にも刺激の強い色が多いテレビを長時間見せることは、集中して音を聞く能力や聞きたい物だけを聞き、聞きたくない物を排除する能力を育てはしない。将来の学習障害児を生み出さないためにもテレビを見せるのはまだ早い。視力に関しても同じである。ただ漠然と見るだけに終わってしまう。赤ちゃんが静かに見るからといってテレビにお守りをさせておくなどはもってのほかである。

絵本などにも興味を示し始めるので、簡単な絵本を見せて、簡単な単語を繰り返し行ってあげるの良いだらう。しかし、興味はすぐに他に移ってしまうことも充分考えられるので、飽きたらすぐに止めるのが望ましい。まだ、手で触ってみて口に持って行ってしまいかもしれない。しかし、慣れてくると、絵本はページをめくって見る物だということは理解して、手でページをめくろうとするしぐさを見せてくれることもある。

2. 1歳から2歳

この1歳から2歳までは知的にも肉体的にも最も発達著しい時期である。大脳が急激に成長するからである。できるだけたくさん話し掛け、遊んであげることで大脳が刺激を

受けて発達する。1歳3ヵ月ぐらいまでに、初語が出て、歩き始める子どもも多い。この歩き始めることで、子どもの世界が著しく開け、新しい経験も増加するのである。

この1歳を過ぎて歩き始めた頃の子どもは自分の世界が広がっていくのを機会に、様々なことにチャレンジしようとする。身の周りにある細々したもの、手に触れられるもの、大人の使っている物への興味は非常に強い。何でも口に持っていき、口で物質の感触を感じ取ろうとしているのである。頻繁に危険なものを食べてしまうこともあるのがこの時期である。つい、「あれはだめ、これはだめ、触っちゃ、だめ」や「ダメ」、「やめなさい」を母親が数多く口にしてしまうのもこの時期である。

歩き始めた子どもが、母親の視界から消えてしまうこともしばしばで、最も目が離せない時期であるため、母親自身が疲れて、ヒステリックにさえなってしまう恐れがある。口調もきつく、「ダメ」という言葉が母親から良く聞かれることも否定できない事実である。

大人の気持ちがとても良く理解できるようになってきている子どもは「ダメ」という強い口調には、恐怖感を抱く。恐怖感を抱かせないように駄目なことを止めさせる方法としては、危険なものは周辺に置かない。あるいは、気をそらせたりするために黙って抱き上げたり、その他のことに興味を持たせるようにすることが必要である。子どもが耳にする声はのんびりした豊かな温かさに満ちた、身体がリラックスしてくるような雰囲気が良い。「びくっ」としてからだが縮み込むような声を出して話し掛けたり、きつい口調で命令的な言葉使いは避けたい。⁴⁾Nelson K (1970)の研究では子どもに対して命令的、拒否的なことが子どもの言語発達に不利に働くことを見出している。

また、よく言われることであるが、愛情が十分に与えられていなかった環境で育った子どもは、一般的に身体の発育には遅れがあり、言葉の出るのが遅いと言われる。筆者本人も養護施設等を訪問して視察する機会を持つこ

とがあるが、施設で育った子どもは言葉が遅いとよく言われるのを耳にする。様々な理由で子どもたちは施設に入所してくるわけであるが、最近には特に虐待等の理由で入所してくる子どもが多い。まず施設の子どもの全般に言葉数が極端に少ない。ある施設に入所している兄弟3人は一番下の弟が4歳である。この施設で暮らすことになった3人の兄弟の誰もが極端に語彙数が少なく、他人と十分なコミュニケーションが取れない。彼ら3人ともが生後まもない頃から、両親には不当な扱いを受けて育ったと報告された。虐待だけが原因とは考えられないが、3人ともに知能的にかなりの遅れが見られた。

子どもが音を耳で聞きながら自分の音とし、言葉の機能を認識し始める時期、1歳～1歳3、4ヵ月頃に、安心してそれらに集中できない状況に置かれたとしたら、それは言葉をマスターする能力が不十分なまま成長していくこととなる。この頃の子どもの拠り所は、一般的には養育者である母親である。その母親に愛されるという環境に置かれない子どもは言葉をマスターするのが遅れ、コミュニケーションを取る方法を学ぶ機会が与えられないことになる。

⁵⁾食べる、眠る、トイレに行くといった人に共通する行為を身につけていくなかでまわりの人が日常的に用いる言葉への感受性も高まっていく。1歳過ぎには言葉のレパートリーは広がり、電話の受話器を耳にあて「チツチツ（もしもし）」と言ったり、スプーンを正しく持って口に入れ「マンマ」と言うようになる。おもちゃの車を手で走らせたりする物の社会的使用は子どもの身の回りにある物について学習されている事を示している。これらの動作的な認知発達は、子どもが信頼や愛着をむける人を通して達成される。それは言葉の遅れた子どもの言語獲得過程からも明らかである。

赤ちゃんは、母親のお腹の中にいる時から愛情を感じていると言われるが、本当に身を持ってそれを感じ取るのは出生した時からの扱いではないだろうか。何も一人ではできな

い赤ちゃんが、誰かに手を掛けて育ててもらう。これが無くては生きていくことすらできない赤ちゃんは、義務的な扱いか、自分に向けて愛情がたっぷり注がれているかどうかは肌で感じ取ってしまう。

そして、安心して生活できない環境におかれた子どもは、周辺の大人の愛情を引くことだけにしか注意が向かなくなってしまう。結果的には本来発達する時期に発達するべき機能が停止してしまうこととなる。そして、この時期以降に同じ発達を期待しても、時期がずれることによって取り返しがつかないこともあるのである。

初語、すなわち⁶⁾一語発話が見られる後半期にはこちらの言葉の問いかけに対して「ウン」と言っとうなずいたり、相づちをうつようなことが見られる。このような対話的関係の下に新しい言葉を子どもは取り込んでいく。子どもが絵本のなかの絵を指さして母親の顔を見る。母親は「それは犬」と答える。すると子どもは「イヌ」と確認するように言いながらじっと絵本のなかの犬の絵を見る。このような親子のやり取りは命名ゲームと呼ばれている。これらの行為が見られ始めると子どもの言語発達がいっそう進展する。

子どもと母親のこの微笑ましい光景は両者の間に既にコミュニケーションが生まれている事を表している。子どもは毎日の生活の中で経験する言葉を覚えていく。食事やお風呂、買い物、散歩とか毎日の繰り返しの中でどんどん新しい単語を覚え、毎日の出来事が自分の身の周りだけでなく社会一般で行われていることなども理解するようになってくる。

1歳半までくらいから、二語を組み合わせて話す「二語発話」が始まってくるが、子どもは50語くらい話せる子どもは2語を組み合わせて話せるようになってくる。「ママ、だっこ」、「パパ、おそと」、などである。この時期の子どもは模倣遊び、ふり遊びを好んで行うようになる。ただ単純に母親や周辺の大人のやっていることを自分でやってみただけのこともあるが、自分一人の「一人遊び」も盛んである。経験する事で自分と他者との

関係を認知し、他者とのコミュニケーション関係にも気づいていく。

村井(1970)は⁷⁾会話の発達には、会話内容に充実、会話を必要とする場面への導入といった知的・社会的発達が関与すると述べている。

サリー・ウオードも⁸⁾知能と言語の発達は車の両輪です。言語が発達するには、知能があるレベルまで発達することが不可欠ですし、また、言語発達が知能の発達を促すようになります。と述べている。

我々が外国語を学習する時に、机の上で習った単語は、試験ではまだ覚えているが、しばらくすると忘れてしまっ、何年か後に、いざその外国語を現地で話せるかというとき必ずしも上手く行かない。もちろん時間の経過という理由もあるわけであるが、語学を学んだ時の現場経験が不足して、本来の使い方がよく理解されていなかったという点も大きな理由の一つとして考えなければならない。

しかも、その外国語が通じるように使えるようになるためには、かなりの練習と、失敗が繰り返されて始めて上手くなっていくのである。言葉を話し始めたばかりの子どもにも同じことが言える。大人の話す会話にジッと耳を傾けて、まだ不十分な発音と舌足らずの話し方で大人の真似をする。自分が普段母親からしてもらっているのと全く同じことを人形を相手に行なったりする。周りの大人がこの遊びに加わってくれることをとても喜び、この遊びを通して、コミュニケーションの取り方などを自然に学んでいく。この時期の子どもは周りの大人のクセや生活習慣などを真似する事も多く、驚くほどにその特徴をよく掴んでいて大いに笑いを誘ったりする。

⁹⁾子どもというのは、言葉を単に「教わって」いるばかりの受身的存在なのではなくて、もっと主体的に自分から働きかけていくなかで言葉を習得していくのだと考えている様である。そして、単に耳で聞いた情報を、頭のなかで処理するのにとどまらず、積極的に身体を用いて対象にかかわるなかで自主的に言葉の意味を理解していく。

すなわち、遊び等や周辺の大人との関わり合いの経験が数多くあればある程、多くの言葉を自分のものにでき、他者との速やかなコミュニケーションが取れるようになる。この幼児期の人間関係の形成が成長してからの友達作りや、壁にぶつかった時の困難に打ち勝って行く強い人間を生み出していく。幼児期に拠り所とする人にいつも見守られているという安心感や信頼感が将来の大きな自信につながっていく。

3. 3歳児

3歳になると「大人 \longleftrightarrow 子ども」という簡単な会話が成立するようになる。この頃には基本的な文法項目がかなりマスターされているため、¹⁰⁾受け身や使役などを用いることができるようになる。また、助動詞の活用も一段と発達し、たとえば、「…(し)ました」や「…(し)ません」といった過去や否定の丁寧形を使うことができるようになる。子どもは、3歳になると幼稚園への入園が可能になる。それは他の子ども達との遊びがとても大切になってくることとも大いに関係がある。普通であれば、この頃までに聞きたい音や声に集中できるし、何か自分のことをやっても他に注意を向けることができるため、保育者の指示に従えるようになってくる。

そろそろ、友達と遊ぶことから社会的行動を身につけていくようになってくる。いつも自分を見守ってくれる優しい大人とのコミュニケーションばかりでなく、自分と同年齢の言葉を持つ仲間とのコミュニケーションの中での仲間間のルールを身につけていく必要がある。些細な事が原因の喧嘩も出てくるがそれを幾度となく経験してこそ、相手を思いやる言葉を覚えていく。

周りの大人が頻繁に語り掛け、様々な日常生活の経験を持てる環境の元で育てられた子どもは、正常な発達を遂げていけば、言葉は平均的な時期に出てくるものと思われる。しかし、¹¹⁾25号の紀要の中で例に取り上げた双子の姉妹は、出生後ずっとベビーシッターに

育てられて食事も時間になれば機械的に与えられて、あまり話しかける事をされなかった。普通3歳であれば大人の簡単な指示は理解し、大人とも完全でないにしてもコミュニケーションが取れ、食事もきちんとではないにしても自分一人で取れるのが当たり前であるのに、彼女等はそれが出来なかった。まず誰とも自分から話そうとしなかった。入園当初の3歳初めの頃は、果たして大人の話が理解できているかどうか把握する事すら出来なかった。しばらくして、保育士の説明していることは普通の3歳児並みに理解できているということがおぼろげながらに分かってきた。ただこれは幼稚園の集団生活の中で他の園児の行動の後について行動してただけかもしれないが、これも模倣という観点からすれば成長が見られるわけである。彼女等2人は何も言わないのにお互いの感情は理解しあっていた。また、常に二人で行動していたので孤独感を感じることも少なかったと思われる。反面、常に二人でいることが他の大人達からの接触を少なくしてしまった可能性も考えられる。仕事で忙しい母親や父親から話し掛けられる事も少なかったようである。

彼女等は入園してから半年後には話す機会も言葉も少なめではあったが、普通に他の園児と会話らしきものが持てるようになってきていた。彼女たちは頭の中で言葉を話す準備は出来ていたのかもしれないが、その練習期間と話すチャンスは逃していたのかもしれない。子どものこの頃の遅れはこの時期であれば、充分取り返す事が出来る。

サリー・ウオードは「語り掛け」育児の必要とその効果を提唱しているが、静かな部屋の中で毎日30分間の子どもと母親だけの時間を過ごすようにする事はかなりの努力と家族に理解がなければ出来ない事でもある。どのように努力してもその時間が取れない日々は現代の日常生活を考えてみても無理からぬことだろう。

しかし、それは、必ずしも形式にとらわれなくても、毎日子どもの目の高さまで大人の目の位置を下げ、しっかり顔を合わせて子ど

もの言っている言葉を反復して遊んであげるといふことだけで良いのである。悲しそうな顔をしていれば思いきり抱きしめてあげるのである。1歳半を過ぎた頃であれば母親が家事をしながらの話し掛けで、子どもが満足する事も充分ある。買い物に出かける途中は歩けば散歩にもなるのであるから、その時々には子どもが興味を引かれているものに注目し、語り掛けをするのである。

ウオードも¹²⁾ここで注意をしなければならぬことは、子どもが興味を示した物に大人が合わせることである。注意の発達の面から言うと今は移り変わりの時期なのです。注意が急にこちらこちらに移ることは、まだ何度もあるでしょう。それでかまわないということ子どもにも話しましょう。そして、子どもの関心がどんなに急に変わったとしても、ひとつ、ひとつに添いながら話しましょうと述べている。

このように、子どもが興味を示した物に大人が合わせると、普段子どもがどのようなものに興味を持っているかがより理解できることにもなる。これは子どもの自主性を育てる意味でも大いに効果があるように思われる。日本社会はもともと幼児を大切にす国民であるが、子どものしつけや学習方法に関しては、一方的な押し付けがましさが目立つ。その点、欧米諸国の個性を伸ばすという教育は、話の主題の選択からして、子どもの一番興味を持っていそうなものに注目して子どもの話題から始めるのである。子どもを中心を持って行くことが、子どものわがままを助長させると恐れることは必要ないのではあるまいか。「しつけ」は別のところでなされれば良い。

その点、祖父母の存在は貴重である。最近の日本の家族は核家族化が進み、祖父母同居はとても少なくなってきているが、お茶の冷めない距離が理想とかで、近くに居住している例は案外多い。同居の場合は、子どもは祖父母と接触する機会も、話し掛けられる度合いも多くなる。時間的にも気分的にもゆとりがあつてのんびりした雰囲気は忙しい生活に追われている両親とは対照的である。話し方

も子どもに対しては一字一句ははっきりと分りやすく話し掛けることが必要とされるから祖父母の話す速度はまさにうってつけである。さらに、子ども中心に話題を運んでくれることも多く、行動も共にしてくれる。甘やかすと祖父母を避けるのではなく、存在する効果が大きいことを期待して欲しい。

祖父母同居の文化は欧米には見られないアジア特有のものであるが、これが子どもの言葉の理解とコミュニケーションを発達させるのに役だってきたのである。最近、保育所で耳にした例であるが、「誰に見てもらってもよいが、主人の両親だけは嫌です。」と言う若い母親がいるそうである。せっかく子どもが理想的な形で言葉の学習ができ、情緒面においても十分な発達が期待できるのに、その機会を自らの手で握りつぶしているようなもので、実にもったない話である。

4. 終わりに

集中して話の聞ける子どもを育てるためには、何が必要なのか。この疑問は大方の人々が持っている。何が必要なのかではなくて、出生してから、周りの大人とコミュニケーションが取れるようになるまでに、我々養育者側が気を付けなければならないことが数多く存在したのである。

音を聞き分ける能力が備わるまでは静かな環境を作り、養育者、通常は母親が子どもの目線に立って年齢にふさわしい内容でゆっくり話し掛ける。これで音を捉え、言葉を覚え、話し方を記憶するのである。顔を覚えるだけでなく、音すなわち声でも母親を認識し振り所とするのである。聞き分ける神経細胞が十分に発達しないのに四六時中、騒音の中に置いたり、テレビを見せておく事などは絶対にいけない。テレビは1歳以降になって30分くらい、しかも親と一緒に見る必要がある。一緒に見ることで共通の話題を持つことにもなる。

そして、遊びを通して数多くの経験を重ね、他者との関係、コミュニケーションのあり方

などを学んでいく。30分間の「語り掛け」育児、日本古来の祖父母によるお守りなど、まだまだ、子どもの言葉の獲得に役立つ援助方法は多い。新旧に関わらず、取り入れていきたい長所は大いに取り入れて、それが子どものためになるのであれば、そのための育児法を作り上げていけば良いのではないか。

注

- 1) 正高信男 2001「子どもはことばをからだで覚える」『発声はリズムによって』第3章、中公新書1583 p70、
- 2) *ibid.*, p71
- 3) サリー・ウオード、2001 槇朝子訳「語りかけ」育児 小学館（東京）p.97
- 4) 横山正幸編著、1997「内容研究 領域 言葉」

- 教育・保育双書 第16巻 北大路書房 p. 37
- 5) 小山正編 2000「ことばが育つ条件」言語獲得期にある子どもの発達 培風館 p.3
- 6) *ibid.*, p.3
- 7) 村井潤一 1970 「言語機能の形成と発達」風間書房
- 8) サリー・ウオード、2001 槇朝子訳「語りかけ」育児 小学館（東京）p.173
- 9) 小山正編 2000「ことばが育つ条件」言語獲得期にある子どもの発達 培風館 p.129
- 10) 横山正幸編著、1997「内容研究 領域 言葉」教育・保育双書 第16巻 北大路書房 p.56
- 11) 長谷部和子 1999「3歳児・4歳児の行動と言葉の発達における考察」東海女子短期大学紀要 第25号 p.73
- 12) サリー・ウオード、2001 槇朝子訳「語りかけ」育児 小学館（東京）p.262